

◎野木京子

今月も、心に響くよい詩が多かったです。

特に印象深かった作品を以下に。

高校のカーディガンは

白くって

集会への廊下は

羊たちの群れ

加藤 美紀

\*場面は多数の女子学生が歩いている廊下で、もこもこした動きが見えるよう。大人しくてよい子たちだなあと素直に思うが、沈黙、抑圧のイメージもあって、緊張感ある場面でもある。

海を知らぬ子の墓に浮輪をおいて

亀山こうき

\*切ない。一緒に海で遊びたかったのに。余分なことは書かれていないけれど、季節は夏で、蝉の鳴き声が聞こえるような気さえした。

道端に立ち尽くす鹿がいて

私に死ねと言った子の

狼狽たような黒目を

思い出す

春町 美月

\*「死ね」とは、一瞬、子ども同士のいじめの言葉かと思ったが、そうではないのだろう。言ってはならない言葉を親に言ってしまった子どもの、うろたえた表情が見えるよう。野生の鹿と同じで、子どもは実は無垢な心の持ち主なのだが。

明日から見た昨日の今頃が正に今

春町 美月

\*春町さんはほかの詩もよかったが、ひとまず二篇のみ掲げておく。時間という概念の壮大な広がりを感じさせられた。昨日の今頃、わたしは何をしていただろう。わたしの過去には、無限大の「今」の瞬間が点々と続いている。

九十度

腰の曲がった

母方の祖母の納棺

大変だったな

加藤 美紀

\*年を取ると、圧迫骨折などで腰が曲がってしまうことが多くある。祖母の痛みと苦難が感じられる。納棺のときに皆が大変だったけど、祖母もまた、大変な人生だった。最後の一行は、二重の意味が出て、味わい深かった。

海月の子ミサの火種のように浮く

細村 星一郎

\*クラゲの子供とは、卵から孵ったばかりのプラヌラのことだろうか。クラゲは、生まれたばかりのときも、大人になってからも、ゆらゆらと浮遊し、異世界の生き物のようだ。聖堂のなかで揺れている火も、異世界で浮かんでいる。張り詰めた孤独な気配も伝わる。

血が流れでる白夜なら美しい

亀山こうき

\*「白夜」は太陽が沈んでも暗くならない夜のことだから、決して真っ白ではないのだが、言葉では、赤と白の対比となり、鮮やかだ。心が痛いときは、いっそ血が流れているほうが美しいし、楽になるということだろうか。

ちょっとだけ 残しておいと

頼んだら

一口弱しか 残さない父

加藤悠

\*なんだかほんわりして、ほほえましくて、楽しい。律儀に「一口弱」残してくれて、それなりにけっこう優しいお父さん。

それぞれの午後が

レモン水に反射している

門野あおい

\* さりげない風景だけど、透明な時間が流れていて、静かな気配。一行アキの空白で、一瞬息を吸って、緊張を高めた。

ママ、おんぶして

って母が泣いて言うから

私は母をおんぶする

うすしか

\* 「ママ、おんぶして」は、ママをおんぶして、のようでもあり、ママにおんぶしてもらいたい、のようでもあり、ひどく切なかった。